

## 手術室におけるリーダー業務の導入 ～業務改善の一環として～

手術室 荒川和美 小林由季  
佐野千史 金丸朝美  
八木美和

### I. はじめに

手術室では、安全で円滑な手術が提供されることを目標にしている。しかし、緊急手術時に部屋と人員の配置が円滑に行えず、昼休憩や会議の人員交代に不手際があり、時間にロスが生じる。この原因は、手術全般を管理する看護師とスタッフとの間に十分な情報の共有がないためである。そこで、「手術室全体を把握できる人」をおくことで、物的・人的に無駄のない効率的な手術室運営ができると考え、リーダー業務の導入に取り組むことにした。

### II. 目的

業務の改善を行う。

### III. 研究方法

現状を把握し、問題点を明確にした。アンケートで、スタッフの意識調査をし、リーダーの必要性・役割・具体的な業務内容を検討した。フローチャー

トやチェックリストを作成した。実際に2ヶ月間試行し、再度アンケートにてスタッフの意見を求め、業務内容・リーダーの役割について再検討した。

### IV. 結果・考察

スタッフが現状に困難を感じ、リーダーの必要性を認めていたことがわかった。そしてリーダー業務を導入し、スタッフが担当している手術に専念できる様になった。師長がリーダーを介して全体の進行状況を把握できるようになった。担当医・麻酔医・病棟への連絡調整が円滑になった。以上3点においてリーダー業務の導入が、業務改善につながるという結果を得た。

### V. おわりに

今後リーダー業務を導入し、マニュアルを改訂すると同時にリーダー養成のプログラムを作成していくことが課題となる。

## 放射線療法を受ける患者に対する看護の改善を目指して ～咽頭癌、喉頭癌患者の抱える副作用による苦痛とは～

8-1病棟 村松美帆 宮澤泰子  
米岡亜沙子

### I. はじめに

当耳鼻科病棟では、咽頭癌や喉頭癌などの癌に対する治療目的で入院する患者が非常に多い。これらの患者の治療法の一つに放射線療法が行われている。放射線の副作用とし、口内炎や嚥下時痛が出現し経口摂取が困難になるケースが多く見られる。これらの患者に対し、含嗽、吸入、鎮痛剤の使用、クーリングなど組み合わせ行っているが、患者が苦痛にたえ治療を終えているのが現状である。今回、放射線治療を終了した患者の苦痛を明らかにし、今後の放射線治療における看護の示唆が得られたのでここに報告する。

### II. 研究方法

平成18年7月～10月までに放射線療法を受けた患者3名に対し、半構成的質問法により面接調査を実施。逐語録及びカルテから情報収集を行い、分析を行った。

### III. 結果・考察

3名ともに口内痛、咽頭痛の出現がみられ、鎮痛剤の使用、食事形態の変更にて対応していった。痛みの出現時期は放射線照射5回目、10回目、13回目であり全員にNSAIDSを使用し打ち1名はオキシコドンを使用した。また、それぞれ痛みが増強した後、含嗽薬へのキシロカイン・エレースの追加を行っ

たが、効果ははっきりとわからなかった。しかしながら、頸部クーリング・アイスボールについては爽快感が得られたという結果であった。

大山らは放射線性口内炎に対し口腔内の適度な冷却は疼痛の緩和効果をもたらすと同時に唾液分泌を促進し、口腔内を清浄化することにより感染の防止、炎症などの効果をもたらし得ると予測される<sup>1)</sup>と述べている。小野らはエレースアイスボールの効果についての研究において、含嗽に比べアイスボールにすることで口腔内にとどまる時間が長くなりエレースの効果である壊死組織の除去、治癒促進等の助長に加え、冷却効果による粘膜血管の収縮により炎症を押さえることが出来た<sup>2)</sup>と述べている。また、口内炎発症の苦痛を軽減するために、エレースアイスボールによる含嗽を行い、従来の含嗽法に比べ口内炎の発症、進行を遅延させ、口内炎の重症化を有意に軽減することができた<sup>2)</sup>とも述べている。

当病棟においては、現在、エレースの使用方法としては含嗽のみとなっているが、患者自身もはっきりとしたエレースの効果を自覚しておらず、看護師も評価できていないのが現状である。今後は、エレー

スアイスボールの使用も含め、検討していく必要があると思われた。

食事については、痛みの程度にあわせ、食への楽しみが持てるような食事内容や形態などを考慮し、栄養課とさらに連携をとっていく必要があると思われた。

#### IV. おわりに

放射線療法の副作用の出現時期や程度は異なるが、口内炎や嚥下時痛が最も患者にとって苦痛であることが明らかになり、現在行われている看護を見直すよい機会となった。今後は他職種との連携を図りエレースアイスボールの使用の検討を含め改善に努めていきたいと思う。

#### 文 献

- 1) 大山和一郎、海老原敏:放射線性口内炎に対する ice-ball cryotherapy の試み. 癌の臨 1996;42: 161-4.
- 2) 小野幸加、阿久津みち、白土三枝:エレースアイスボールによる放射線性口内炎の軽減効果. 茨城病医誌 1996;21:164-4.

## 児の個性を大切にする育児への援助 —入院中における品胎褥婦への関わりを通して—

6-1病棟 鈴木恵美 渡邊幸子

#### I. はじめに

多胎育児において母親は疲労が強く、時間的余裕のない中で育児に追われている事が明らかになっている。多胎児は低出生体重で出生する事が多く、小児科や Neonate Intensive Care Unit (NICU) へ搬送になり、児の退院は母より後になるケースがほとんどである。これまで多胎の妊娠褥婦への看護を行ってきたが、入院中は妊娠期の切迫早産への関わり、産後は母体側のケアが主であった。その為、実際の育児に携わることがなく母親は退院し、その後の育児に関する不安に対し看護が十分とは言えなかつた。今回品胎褥婦で産後の入院期間が通常より長く、他院 NICU から退院し当院産科病棟に 3 子全員がそろい、入院中に育児支援が必要とされた事例に遭遇したため報告する。

#### II. 研究の目的

多胎育児において育児技術習得に伴う母親の気持

ちの変化を明らかにし、各児の個性を大切にしていくための育児支援について明らかにする。

#### III. 研究方法

40 歳代前半の品胎褥婦 (T 氏) を対象とし事例検討研究を行った。産後 3 子全員が他院 NICU を退院し、当院産科病棟にそろった日から、本人と 3 子全員が退院するまでの 37 日間を調査期間とした。

#### IV. 結 果

T 氏は、はじめ育児に対して積極的な様子ではなく、育児に慣れるのは退院後でよいと考えていた。初期の育児姿勢に最も大きく影響を与えたものは疲労であった。また 1 人ずつゆっくり関われない事や効率性を重視する育児に対し罪悪感があった。1 子ずつと大切に関わりたい、知りたい希望があったため本人と相談し、評価し 1 週間ごとにお世話のスケジュールを作成した。身体の回復、気持ちの変化に合わせ、育児の時間を延ばし、同時にお世話する児